
文化祭、二日前の夜

未知の道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

文化祭、二日前の夜

【Nコード】

N4087F

【作者名】

未知の道

【あらすじ】

文化祭、二日前の夜に起こった物語……………

（二日間で作った作品ですのでつまらないかもしれませんが）……………

11月3日、1、2話修正……………

1（前書き）

申し訳ありません！
っ嫌いな方はお戻り下さい！

つまらないものが大

「……………」

文化祭を二日後に控えた水光高校の校舎には色とりどりの飾りが付けられ、空き教室にはほぼ完成しかかっている看板や小道具が足の踏み場がない程散らかっている。

「……………もう、こんな時間か。」

午後9時、一年B組専用作業場の三階の空き教室では、高校入って初めての文化祭に燃えている少年、睡蓮寺 健太が最後の追い上げの為に残っていた。

「ってか、一人かよ…、あいつら少しは手伝えよなあ」

薄情に帰っていったクラスメートにぶつぶつと文句を言いながら、冥土 喫茶と、ゴシック体の文字で太く描かれた看板の輪郭を藍色で染めて行く健太、七日間もやってきたと在ってかなりの速さで看板を染めて行く。

「ふっん、ふふん」

学校の備品であるCDコンポから流れて来る音楽に合わせ鼻歌を歌いながら、次々と看板を完成させて行く。

ガラガラ

前触れもなく開く扉

「…おお、まだ残っていたのか、健太」

そっぴいなから教室に入つて来たのは、健太と同じ制服の紅い色違いを着たショートカットの目つきの悪い、眼鏡をかけた少女。

「…ああ、美紀か、眼鏡なんかかけてたから一瞬誰だかわからなかった…、つてか、お前つて目悪かったっけ？」

いきなり人が入つて来た事にはさして驚きもせず健太は、美紀と呼んだ少女から目を離すと看板の塗装を再開する。

「ああ？ ……おお、そっぴえばさつき、冥土服の試着で接客担当が度なしでも眼鏡かけたほうがいいから、かけっぱなしだったわ」

タバコを加えながらかけていた眼鏡を外し、ケースにしまう美紀。
学校一の不良で知られている美紀の行動に健太はいちいち気にかける事はしない。

「そつか、目が悪いっていうわけではないんだな…、準備はそつち、ちゃんと出来てる？」

「お、おお、ちゃんと出来てるぜ…、まあ、相変わらず面倒臭いかな」

「そつか…」

「ああ」

「……」

「……」

看板の塗装を終え、帰り支度をした健太は美紀の隣に向かい合うように座る。

「「あのさあ」「」

同時に声を発する二人、頬を若干染めて目を逸らす。

「……」

「……」

「…な、何だよ、」

気まずいような静寂が堪えられなくて先に口を開いたのは美紀のほうだ。

「そ、そっちこそなんだよ」

二人とも目を合わせないように顔を逸らしながら、視界の端で相手の動きをうかがう。

「…お前が先に言えよ、男なんだから…」

「…そ、そういうのは関係ないだろう、今の時代男女平等なんだから」

「た、確かにそうだよな、…だったら一緒に言うか？」

「うん、…早く、済ませたいからな」

再び向かい合う二人、うつすらと色づいていた頬は見つめ合った瞬間、林檎のような真っ赤な色に染まった。

「…それじゃ、いっせーの、でいっせ」

「ああ…」

すう、と音をたてて息を吸い込む二人、美紀が合図を告げる為に口を開く。

「いっせーの…」

「俺と、…」

ダーン!!

「ダメエーーーー!!!!!!」

二人の言葉を掻き消し、教室の扉を、ダーン!!と、物凄い勢いで開け放ったのは三編みおさげに、なぜか巫女さん姿のちっこい少女だった。

「だ、ダメ! 絶対対にダメ!! 未成年の不純異性交遊は、お天道様が許しても私、立花 雅 が絶対対に許しません!!!」

「……………」

突然の出来事にびっくりした二人は、雅と名乗った少女をア然とした面持ちで見つめる。

「何言ってんだちっこいの俺はただ…」

「ちっこいの！？ 私の事ちっこい呼ばわりした！？ これでも私はあなたたちの二年先輩よ！？」

怒りで顔を真っ赤にしながら大声で自分は先輩だと主張する雅。だが、その姿は身長のせいでいいところ小学生ぐらいにしか見えない。

「…嘘つけ、んなちっこい先輩いるわけないだろう 子供は帰ってお母さんにでも抱き着いてろ」

雅の目の前に移動した美紀は小馬鹿にした表情でポケットから飴を取り出す。

「ほーら、ほーら、飴でちゅよ♪小学生は帰りまちようね♪それともお姉ちゃん達と帰りまちゆか？」

飴を顔の前でぶらぶらさせながら赤ちゃん言葉で雅に話しかける美紀。

ブチッ！

「…あなた、さっきから黙って聞いていれば調子に乗って…、いい加減にしないと、…ブチ飛ばすよ？」

おちゃらけている美紀を睨みながらドスの入った声で脅し文句を言う雅。

今までとは違うふいんきに美紀は一步後ずさるが不良で知られている美紀は雅を睨み返す。

「ふ、ふん！ 出来るものならやってみろ、このちっこいの！」

売り言葉に買い言葉で返す美紀。

「……仏の顔も三度まで、」

ビュン！！！！ カチッ！

「え、ええっ？、ちょ、ちょっとま…」

手に持っていた鞆を放り投げ、巫女服の懷から可変式の警棒を取り出し構える雅。

「だぞ、このアマア！！！！」

ビュオン！！！！

「ひい！？」

凄まじい勢いで繰り出された突きを後ろに倒れることによってかろうじて避ける美紀。

だが、完璧には避け切れなかったのだらう、金色の髪が数本、しゃがみ込んだ美紀の目の前にハラリと舞落ちる。

「ちっ、外したか、…まあいいわ、次で決めればいいだけだから」

「じよ、冗談じゃあねえぞこのアマ！！ 今の喰らってたら怪我どころじゃなくて確実に死んでたぞ！？」

「…ん？ 何言ってるのあなた？ 殺す気でやってるんだから当たり前じゃない」

「ひ、人を殺しちゃあいけないっていう日本の法律を知らないのかお前は！？」

「……………」

「…ん、そういわれればそんな法律、あったような…」

「だ、だろ！？ てか、思い出すの遅っ！！ この法律、かなり重要だから！！」

「んっ…、うん！ では、この場では無い事にする。」

「な」

ビュン！！！！

反論しようとした美紀の顔近くを掠める警棒。

突き出した張本人はニツコリと満面の笑みを浮かべる。

「おかげさまで何となくひっかかっていた疑問がスッキリしたよ、御礼として一瞬であの世に送ってあげる。」

気分よさ気に突き出した手を戻し、再び構える雅。

対する美紀は目尻に涙を溜め、今にも泣き出しそうな顔で雅を見つめる。

ビュオン！！！！

そして、空気とともに突き出される警棒。

今度は完璧に美紀の顔面直撃コースだ。

ズパン！！！！

「…ふ、ふえ？」

「なっ!？」恐怖で目をつぶっていた美紀がいつまでも訪れない衝撃を疑問に思い目を開いたその先に広がっていたのは、雅の突きを鞆を盾に防いでいる健太の姿だった。

「ったく、何してんすか先輩、素人相手にあんな事しちゃあいけないでしょ」

「だ、だって、健くん」

「だってまあさつてもありません、反省して下さい、先輩」

「うむー!」

「唸つても駄目です」

「ぷうー…」

「フグみたいに膨らんでも駄目」

「ボソツ バーカ、健くんのバーカ」

「聞こえてますよ先輩、悪口も駄目です」

「うにゅゅー」

「変な顔しても駄目です」

「…ん、もうー!」

「…牛のまね事ですか？先輩　ちなみにそれも駄目です」

「違うの！！」

「違くないです先輩」

「ガァァ！！！！！！！！！！」

「うるさいです先輩」

まともに取り合ってくれない事に郷を煮やし、怪獣のように叫ぶ雅を無視した健太は尻餅を着いたままこちらを見上げる美紀に手を差し出す。

「大丈夫か？美紀」

「え、あ、ああ」

差し出された手を握り、起き上がらせてもらう美紀。

「あ、あのさ、あれ、お前の知り合いなのか？」

指でいまだにガァ、ガァ叫ぶ雅を指して健太に尋ねる美紀。

「ああ、俺がよく行く神社の娘さんで、うちの先輩、ちなみにちっこいとか、ちみっこいとか身長のことを馬鹿にすると三度目に必ず

キレル」

警棒が突き刺さった鞆を持ち上げ、鞆の中身を確認する健太。そして、貫通してしまった教科書達を取り上げると

ブン！！！！

こちらを見ながらまだガア、ガア叫んでいる雅に投げた。

ズゴッ！　ズゴッ！　ズゴッ！

重たい音を出して雅の頭に当たる教科書達。

「いったーい！　何すんの！？　健くん！　先輩に向かってー！！」

「うるさいです先輩」

「ねえ、それってかなり酷くない！？　今、教科書の角が当たったんですけどー！！」

「それ、弁償してくださいね先輩」

「無視っ！？　無視なの！？」

「ああ…それと鞆も弁償してください先輩」

「無視…、無視はやだよ！？ 健くん！！」

「…さてと、さっきの続きを…」

手元にあつた鞆を再び雅の頭に当てた健太は先程とは打って変わってふいんきを一変させた雅に苦笑している美紀に振り返る。

「あ、あのさ、美紀」

「お、おう、なんだ、健太」

「……俺と一緒に、帰らないか？」

「…おう、帰ろうぜ健太、実は俺、お前が帰るの待ってたんだ、ちよつと、この時間に一人で帰るのが…」

「ああ、確かに怖いよな、この学校 なんか森の中みたいな位置に在るし…」

「だろ、確かに怖いよなこの位置は… こんな時間、こんな所から一人で帰るのは馬鹿か物凄く鈍感な奴だよな」

ジッ

そんな話しをしている二人を妬ましげに見つめている雅。

どうやら、二人の話しに入るタイミングを見計らっているらしい。

「じゃ、帰ろうか」

「おう」

「待ったあ！！」

扉をくぐろうとした二人を呼び止めた雅は、二人の目を見ながら自分の存在を示すように親指で自分の胸を指す。

クイツ、クイツ、クイクイツ

「なんですか先輩、胸の自慢ですか？ はっきり言って先輩には自慢なんて出来ませんよ？」

「健くんそれってセクハラだよ！？ 違うから、私！ 私！！」

「あつ、あゝあゝあゝ、すいませんでした先輩」

ブンッ！ ブンブンッ！ ブンッ！

「そう！ そうだよ！ 健くん！！ そうなのだよ！！」

首を大きく振り、肯定をする雅。どうやらわかってくれたと思った雅は嬉しそうに顔を綻ばせ、教室内に放り投げた鞆を取りに行く。

「礼儀はちゃんとしなさいといけませんよね、それじゃ、お先に失礼します先輩」

そういつて頭を下げ、教室を後にする健太と美紀。
予想外の健太の反応に雅はガク然として鞆を持ったままフリーズする。

「健くん！？ …………… だから、ちゝがゝうゝ！！」

フリーズ状態から戻った雅は、いなくなった二人を追いかけるべく夜の校舎を走って行った。

2（前書き）

前話と比べてますますくだらなくなっております。

前話がくだらなく感じる読者様は今すぐお戻り下さい。

ちなみにこれが最終話です！

『物を大切にし、生徒達の自治を認めよう』

という、初代校長の言葉により、ここ水光高校は部活動に試験の勉強、居残り、イベント等の夜間居残りが先生の監視がなくなけるといふ、かなりの生徒自治を認めている変わった高校である。

「なあ、あの先輩置いてきてよかったのか？」

高校最初の文化祭の最後の用意を終え、健太と美紀はエコ活動という名目で、校舎内にいる居残り生徒達が三十人を切ったら校舎全体の電気を消す、といった活動のせいで真っ暗な闇の中を非常灯の頼りない明かりの中を歩いていた。

「ああ、先輩なら大丈夫、なんせ立花流疾風剣免許皆伝者だから、そこいらの暗殺者より強い」

「た、立花流、ってあの立花か？門下生の数が世界一、っていう…」

「そう、あの立花流」

「ど、道理であんなに強かった訳だ」

先程の事を思い出したのだろう、顔を引き攣らせながら答えを返す美紀。

「…まあ、ちよつと常識はずれなところもあるけれど、禁句さえ言わなければかなりいい人だよ、先輩」

「あ、ああ、もし今度会ったらお前のほうから俺が悪かった、って言っていた、って言つといてくれ」

「ん、了解、でも先輩が来たらお前も謝れよ」

ヒタツ…

普通の学校の倍以上の廊下を歩き、階段までたどり着いた二人は、突然後ろから響いてきた音に立ち止まった。

「…？　なんだ？　今の音？　聞こえたか？」

「聞こえた、…なんか足音みたいな音じゃなかったか？　もしかして……先輩？」

「いや、ちみ……雅先輩だったら、反対だろう？　だって、教室はあっちだし」

そういつて、美紀は左の廊下を指差す。

「だったら、誰が残ってたのか？……どうする？ 誘つか？ なんか今の足音一人ぼかったし……」

「……うーん、でも不良の俺がいるんだぜ、誘ってもなんか断られそうだし……」

「大丈夫、大丈夫、お前そうやって、奥手だから友達出来ないんだよ」

「うつさいなあ、どうせ俺は奥手ですよ、……悪いか」

「はいはい、じゃ、誘うぞ」

「わ、ばかつ、まだ心の準備が……」

「おい！ その人……！」

手でメガホンを作り、大声で前の廊下に向かって呼びかける健太。だが、返って来たのは今までと変わらない静けさだった。

「ん？ 聞こえなかったのかな？」

「だ、だから言ったらう、俺がいるから出てこれないだけだって……もう帰ろうぜ、健太」

「うーん、…でも女の子だったら可哀相だしなあ」

「べ、別に―」

ヒタッ

「お、こっちにくるぞ」

「う…緊張してきた」

ヒタッ、ヒタッ、ヒタッ

暗闇から徐々に近づいてくる足音

ヒタッ、ヒタッ、ヒタッ

「「？」「」

充分に声をかけられる距離になったというのに一向に声をかけて来ない相手を不信に思う二人。

しかも、この距離なら相手の水光高校の制服の色ぐらい確認出来るはずだがそれすら出来ない。

ヒタッ、ヒタッ、ヒタッ、ヒタッ、ヒタッ、ヒタッ、ヒタッ、ヒタッ

「な、なあ、もしかしてこれって…」

「ば、馬鹿言うな、健太、ぶっ飛ばすぞ…」

さすがにここまで音が聞こえているのに一向に見えない相手に薄気味悪く思ふ二人。

ヒタッ

およそ十数メートルぐらいだろうか、それぐらいの間隔でいきなり止まる足音。

「だ、誰だよ！ 返事ぐらい言え！！」

「そ、そうだ！ 返事ぐらいしろ！！」

恐怖で思わず語気が荒くなる二人。顔は恐怖に歪んでいる。

ドクン、ドクン

今にも爆発しそうな程高鳴る二人の心拍音。

「―ねえ」

「うわっ！！！」

「ひあっ！！！」

急に恨めしそうな声に話し掛けられた事びつくりした二人は情けない声をあげた。

「び、びつくりしたあ」

「も、もうダメ心臓止まるう」

「ーうう、ごめんなさい、びつくりさせてしまつて」

そう謝りながら暗闇から現れたのは真つ黒な水光高校の制服を着た長髪長身の少女。

「ーあ、あの、お話してもいい？」

壁を向いて頭をもたれて拳で壁を叩いている健太としゃがみ込み胸に両手を当てている美紀に話しかける長髪の少女。

「あ、ああ、いいよ」

「大丈夫、大丈夫、私は大丈夫……」

問い掛けられた声に向き直る二人。美紀は動揺の余り一人称が変わってしまっている。

「ーほ、本当にごめんなさい、あたし、昔からこうなのよ恨めしそうな声しか出せなくてクラスで浮いてしまつて……あ、でも、文化祭の時は結構役に立つのよあたし、お化けやらせれば右に出る人なんていないって……ああ、でも、影が薄いから気付いてくれる人結構少ないのよね……あああ、でも貞子……」

喋り出した、と思つたら自分の声の事しか話さない長髪の少女に痺れを切らした健太は話しかける。

「あのさ」

「ーひゃ、ひゃい!？」

自分の世界に入っていり切っていたらしい、長髪の少女は健太のかけた声にびっくりしたらしく変な声を上げた。

「ー、ごめん、そんなにびっくりするとは思わなくて……。俺の名前は健太、で、横にいるのが美紀」

「ーっ、うん」

「えーっと、出来れば名前を覚えてくれないかな?……」

「―あ、あたしの!？」

「……そう、イツツ、ユー、…これってあってる？」

首を傾げながら美紀の方へ向く健太。

「英語3点の俺に聞くな…今のだって俺にとっては未知の言語だ」

「……………3点」

「う、うるさいな、俺は一生日本で生きていくから大丈夫なんだよ」
「!」

ポンッ

「……………まあ、人生いろいろあるさ……………カツ丼、食つか？」

なぜか刑事ドラマ風に肩に手を置き、哀れむような顔で美紀を励ます健太。

「いらんわ! アホオ!!!」

「ん? どうした? なんでも相談してもいいんだぞ? ……まあ、別料金で請求するが…」

「料金とんな!!!」

「フ、フフ…」

二人の漫才を見た長髪の少女は楽しそうに笑う。
それに気付いた二人は漫才をやめて長髪の少女に振り向く。

「フフフ……あ、ご、ごめんなさい、あたし失礼ですよ、友達でもないのに笑うなんて…」

「ハハハハ、大丈夫だよ、美紀が馬鹿なのが悪いんだし、それに…失礼かもしれないけど、もう友達みたいなもんじゃん？」

「へ？ あ、あたしなんか友達！？」

「うん！ 出来れば名前を教えて貰えるとうれしいんだけど…」

「あ、あのさ、俺も出来ればその、と、友達の中に入れてくれないか？」

二人のやり取りを見ていた美紀は申し訳なさそうに手を上げると長髪の少女に問いかける。

「えっ！？」

口を手を当ててびっくりする長髪の少女

「や、やっぱりやだよな。学校一の不良の俺なんかと友達になるなんて…」

どうせ、俺なんて…、と呟きながらしゃがみ込み廊下にのの字を書き始める美紀

「―あ…そ、そうじゃなくって…、わ、私、あなたたちからそ、そんな言ってくれるとは思わなくって、だ、から…う、…うれ…嬉しくって」

急に顔に手を当てて泣き出す長髪の少女
その異変に気付いた美紀はあわてふためく。

「えっ、えっ、そ、そうなのか!？ ご、ごめんっ！ 俺が出来る事ならなんでもするから許してくれ!！」

長髪の少女に向かって必死に頭を下げる美紀

「―グズッ……本当に?…」

目に溜まった涙をハンカチで拭った長髪の少女は、いまだに頭を下

げている美紀に歩み寄るとポケットからビーズで作られた指輪を渡した。

「…？ これは？」

「―それは、私の友達の証なの……、う、受け取ってくれるよね？」

ビクビクと美紀に声をかける長髪の少女

手渡された指輪を見ていた美紀は長髪の少女の言葉に嬉しそうに頬を綻ばせると勢いよく頷く

「うん！ もちろん！！」

満面の笑みを浮かべ、貰った指輪を長髪の少女と同じ、右手の薬指に嵌める美紀

長髪の少女はそれを嬉しそうに眺めると、壁に体をもたれさせて笑みを浮かべてこちらを見ている健太に歩み寄った。

「―えっと、あの、その、……わ、私と友達になって下さい！！」

頭を下げながらビーズの指輪を差し出す長髪の少女

それを見た健太は迷わず指輪を手に取り、同じように指に嵌めて長髪の少女に満面の笑みを返した。

「ずっと友達だぜ！！！！」

指に嵌めた指輪を見せるようにして親指を立てた右手を長髪の少女に突き出す二人。

「—うん！」

笑いかけてくる二人に長髪の少女は右手の親指を突き出す

「—ほ、本当に、ありがとう、二人とも…、わ、…わた…私…」

両手で顔を押さえる長髪の少女

「泣くな、泣くな、嬉しいんだったら笑わなけりゃ損だぞ！」

「そうそう、美紀の言う通りだよ、楽しいんだったら笑わないと」

ニッコリ、と長髪の少女に笑いかける美紀と健太

「—うん！」

顔を上げ、美紀と健太に笑いかける長髪の少女

「…でさ、あなたの名前は、何て言う名前なの？」

人生初の友達になってくれた長髪の少女に満面の笑みで名前を尋ねる美紀

尋ねられた長髪の少女は美紀の満面の笑みに嬉しそうに頬を綻ばせると名前を名乗る――

「――私の名前は」

ユサ、ユサユサ、ユサユサユサ

「お〜き〜て〜、健くん〜」

揺さ振られている感覚と硬い廊下独特の感触、そして誰かが自分の身体の乗っかっているような重さに健太は目を覚ました。

「……何してるんですか、先輩」

「うふふ♪ 健くんが起きないから乗っかつちゃった♪」

はしやぎながら馬乗りで乗っかっている雅
健太が目を覚ましたと知ると雅は目を閉じて健太の唇に向かって自分の唇を近づけてきた

「わ、ちよつ、ちよつと先輩!!」

「? 何? 健くん」

焦りながら雅の肩を掴み、動きを止める健太

「な、何をする気ですか、先輩?」

「……ナ、ナニって……健くんのえっち……、わ、私はただ、お

はよつのキスしようとしてただけだよ……」

何か、と勘違いしているらしい雅は健太から目を逸らすと恥じらいながら頬を染める。

「……あゝ、もう、なんか突っ込みをする気もおきません……、とりあえず上からどいて下さい、先輩」

「……で、でも、健くんがどうしても、っていうなら……ぶつぶつ両手を頬に当ててぶつぶつ言いながら恥じらう雅なかなか上から退こうとしない雅に健太はかつたるそつに身体を起こす

コロンッ

健太から転がり落ちる雅

落ちた雅は落とされた事にも気付かずにいまだにぶつぶつと言っている。

「……で、でも健くん、ダメだよ……、ま、まだ私達は学生だし……、それに学校の廊下でなんて……、はっ！ も、もしかして、それが健くんの趣味なの！？ ……で、でも、もしそれが健くんの趣味でも……、わ、私は健くんのこと好きだし……、ああ、わ、私はど、どうしたら……ぶつぶつ」

床にぶつぶつ言いながら倒れ、うずくまる雅に疲れたように首を振る健太

「先輩」

「ぶつぶつ」

「先輩！」

「ぶつぶつ」

「……」

「ぶつぶつ」

「……」

「ぶつぶつ」

「……」

「ぶつぶつ」

「ボソッ…好きです、先輩」

シュバッ！

「私も！ 私もだよ！！ 健くん！！！」

背景に向日葵が見える程の笑顔を咲かせて立ち上がる雅

「嘘ですか、やっぱり…」

ニコニコ笑いながら健太に抱き着いてきた雅にため息を吐いた健太は問いかける。

「…先輩、俺がなんで廊下なんかで寝てたかわかります？」

「んーん、わかんない」 私が気がついて戻って来た時には健くん
と…」

言葉を一旦区切り廊下の傍らに倒れている美紀を指さす雅

「その女が寝てたの」 それより」 今、健くんが言ったの
本当？」

「ああ…」

「本当に！？ 私、嬉しい！！！」

嬉しさの余り跳びはねる雅、だが…

「…冗談だから気にしないで下さい、先輩」

ピシッ

続く健太の言葉に石化した。

ユサユサ、ユサユサ

「美紀、おい美紀！」

満開の笑顔を浮かべながら石像と化している雅を無視して美紀に歩

み寄った健太は美紀を起こすために身体を揺さぶる。

「ん……」

微かに身じろぎをして目を開けた美紀は集点のあっていない目で辺りを見回す

「ん？ 健太が何人もいる？」

「……………帰ってコーイ!!」

バッチーン！

突然、意味のわからない事を言い出した美紀におもいつきり平手を張る健太

「いったーい！？ なにしゃがる健太!!」

「…目が覚めたか美紀？ いきなり変な事言うから馬鹿が酷くなったかと思った……」

「んなわけあるか！ つうか、おもいつきりやりやがったろ!？」

「ごめんちゃい」

「っ！？ お前、ちよつと、表出る！！！」

適当に返された謝罪の言葉に今にも殴りかからんばかりに構える美紀

「それより、なんで俺達こんなところで寝てたんだ？」

怒り心頭でこちらを睨んでいる美紀を無視して質問を投げかける健太

「ああ！？ ……うーん？ そっいえばなんで廊下なんかで寝てたんだ？」

首を傾げて考え始める美紀

健太はそんな美紀を見てほくそ笑む

「な？ 不思議だろ？ ……ああ、それと美紀、先輩がそこで固まってるから一応謝っておけよ、まあ、多分忘れてると思うけど…」

「うーん？ ……わかった、謝って来るよ…」

美紀はいくら考えてもわからない疑問を胸の奥にしまい込むと健太の指差した先、いまだに石像と化している雅に歩み寄った。

「スイマセンでした！！ 雅先輩！ 身長の事を馬鹿にして！！！」

幸福そうな笑みを浮かべて固まっている雅に頭を下げる美紀

「……………なあ？ これって許してくれたのかな？ っつか、大丈夫か？」

いつまでたっても返事を返さずに固まっている雅を指差し健太に尋ねる美紀

「んー…、許してくれたと思うけど……………まあ、ほっとけばいいよ、そのうち再起動するし」

「そ、そうか、…じゃあとつと帰ろうぜ、健太」

「ああ、もう10時回ってるしな」

「え…さ、最悪だ、門限に間に合わねえ！！ とつと帰ろう、健太！！」

「ああ、それじゃ…」

「「お先に失礼します！！ 雅、先輩！！！」」

静まり返る校舎内、夕日はオレンジ色に染まり、今日の文化祭生徒公開を終えて、生徒達がほとんど帰った水光高校は夕方から夜にうつり替わるための薄暗闇に包まれていた。

「け〜ん〜く〜ん〜!!!」

そんな薄暗闇の中、校庭から聞こえてくる聞き覚えのある声に今日の片付けをしていた健太は窓を開けた。

「一緒に、か〜え〜ろ〜よ〜!!!」

ブンブンと手を振ってこちらに大声で話しかける雅を見つけた健太は、校庭の雅に向かって声をあげる。

「いいですけど、もう一人誘っていいですかぁ!!」

「いゝよ!!」

両手で円を描き健太に了承の合図を返した雅に、手を振り返した健太は机に座りこちらを見ていた美紀に話しかける。

「…という事だけど、もちろん一緒に帰るよな？」

「…行っているのか？」

不安げな顔をして疑問に疑問を返してきた美紀に笑いかける健太

「ああ、もちろん!」

当然、と言わんばかりの清々しい笑顔

「…そ、そうか」

赤い顔を、目を逸らして隠した美紀は鞆を手を取った。

「…じゃ、一緒に帰る」

健太はそう言い残し、教室を後にした美紀を笑いながら追いかけた。

「…ん？」

階段近くにやってきた美紀は突然話しかけられたような気がして立ち止まった。

「どうした？ 美紀」

後ろを歩いていた健太は突然振り返った美紀に問いかける。

「いや、なんか……、今、話しかけたか？」

眉を寄せて首を傾げながら健太に話しかけた美紀は夕暮れ色に染まった廊下の奥を見つめる。

「うーん……、聞こえたような気もするけど……」

健太も美紀と同じように廊下の奥を見つめる。

サワサワ

吹き抜ける、風の音

しばらく耳を澄ましていた二人は聞こえてきた声に気がついたら返事を返していた。

「――ずっと、友達だよ？」

「ああ！」

「うん！」

満面の笑顔でポケットに入っているビーズの指輪を握り締めた二人は雅の待つ校庭に向かって歩き始めた。

2（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

・・・・・・・・・・11月3日の小説修正で、前2話に登場していた長髪の少女（この仮称も修正後）の名前が出てこなくなつたのをこの場を借りて謝罪させていただきます。m（――）m・ちなみに彼女の名前は、彼方・明でかなた・あかりございます。できれば評価、感想の方をお一つお願い致します。

関係ない物語り（前書き）

この物語りは文化祭二日前の夜とは関係ないです。新たに短編として投稿するのが面倒だったので此処に投稿させていただきます。ご了承ください。

関係ない物語り

おそらく、誰もいないだろう

青白い月光に照らされる無機物のビルの上にその人影は在った。

歳は十三ぐらいだろうか、金髪のボーイッシュヘアをした少年だ。少年の服装は、学校の制服だろう。白いワイシャツ、黒いジャケット、茶色のズボンを着ている。

「…」

その少年は身じろぎ一つせずにもるで音楽を聴きいつているかの如く眼を閉じて屋上の縁に座っている…。

「…ふう」

目的を果たしたのだろうか？

軽く息を吐きだして伸びをした少年は立ち上がり傍らに置いてあったケースに手を伸ばす

「…えっと、今日は風が凪いでるから…」

そう、一人で独白しながらケースの中身のバイオリンを取り出し準備をしてゆく少年

「よし、準備完了、後は弾くだけ」

少年は爛々とした青い眼を今だに青白い顔を隠さない月に向けた。

「…全力で行かせて貰いまーす」

バイオリンを構えた少年はそう言うのと右手に持った弦でバイオリン

を弾き始めた…。

表れる旋律はとても少年が弾いたとは思えない程熟成されたもので聞いた者を虜にする魅力を持った音だった。

優しさの中に、時には激しさ、悲しみ、怒り、嬉しさ、等を感じさせる

「…うーん、やっぱり、何かが違う」

首を傾げ眉を寄せる少年は何が気に入らないのだろうか、不可解気にそう漏らすと後ろを振り返った。

「ねえ、何が足りないと思う？」

問いを出しながら少年が振り返る。

その先にあつたのは月によって青白く染まったコンクリートの床と屋上から下の階へと続く階段があるドアだけだった。

「へ？、あれえ、今確かに…」

誰かが居ただけど、と言おうとしたその時だ、

ドンッ！

突然の衝撃で少年の身体が床に押し倒されたのは…。
驚き、後ろを向いていた顔を振り返らす少年

「…」

「…にゃ」

…そこに居たのは目をキラキラさせ、少年の身体にダラ〜ンと乗ったおよそ1メートル程の黒猫

「…あのさ、毎回毎回びっくりするから、止めてくれない？」

少年はさして驚きもせず黒猫を自分の身体から退かそうと手にしていたバイオリンを床に置き黒猫を掴むが…

「ぬがが、お、重い？」

「にゃ」

少年の力が弱いのか、それとも黒猫が重いのか、びっくりもしない…というか、黒猫がガツチリと制服を爪で引っ掛けている。

「ふんぬばあ、い、いい加減離れなさい、クロ」

「にゃ、にゃ」

黒猫こと、クロを引き剥がそうと躍起になる少年
クロが制服を爪で引っ掛けているのを未だ気付いていない。

「…っ、はあああ！」

「にゃ、にゃ、にゃん」

烈功の気合いと共にクロを引き剥がそうとする少年
顔は赤く染まり、目は血走っている。

「…も、もうだめ、ギブアップ」

約三十秒程頑張った少年はそう言つとクロから手を離し大の字に寝そべった。

それを好機と取ったのだろうか、クロは瞳に鈍い光りを宿すと少年の顔を蹂躪し始めた…舌で

「わあ、ちよつ、ちよつと、やめ、ク、クロ！うわつぷ、や、やめて〜！」

「にゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃん」

憐れ、少年はクロの唾液が顔いっぱいに付着する…

「その辺にしときなさい、クロ」

鈴を転がしたかの女性の声がビルの屋上にこだまする。

「にゃ！」

その声に反応してクロは一瞬の内に少年の上から離れ、すぐ横に座りの体勢になった。

「た、助かりましたあ、アキラさん」

そう言いながら床に倒れた身体を起こす少年の目の前には…

「いいえ、家臣として当たり前の事をしたまでです、雅巳様^{まごみ}」

黒のワンピースを身に纏い、腰まである漆黒の髪をたなびかせた色白の女性が居た。

「家臣だなんてとんでもない、それに、様付けも止めて下さい、もう家族なんですから」

「いいえ、私はあなたの忠実な下僕、いくら雅巳様の命令でもそれだけは譲れません」

そう言いながら雅巳の傍に歩いて来た女性、アキラは黒いハンカチを肩に掛けた鞆から取り出すと雅巳の顔を拭き始める。

「わ、大丈夫ですって、自分で拭けます」

そう言って雅巳はハンカチをアキラの手から奪おうとするが…

「いけません！雅巳様の御手が汚れてしまいます！それに、わたくしの楽しみを奪わないで下さい！」

アキラはそう言ってやんわりと雅巳の手を引きはがす

「…アキラさん？今何て言いました？」

「はい？」

不可解気に眉を眉間に寄せ、雅巳はアキラに疑問を投げかける。

「いや、今なんかおかしいな言葉が聞こえたんですけど…わたくしの楽しみを奪わないで、って」

「あつ、あー！ い、いい加減、雅巳様も楽しみを見つけないといけませんね！ って言いたかったんです！」

雅巳の顔から手を離し、胸の前で手を打ちながら何故か顔を真っ赤に染め上げ大声でそんな事を言うアキラ
そんなアキラを訝しく思ったのか、雅巳は口を開いた。

「え、えっと、僕の楽しみならもう見つかってますよ、こうやって外でバイオリンを弾くことですから」

「そ、そうでしたね、雅巳様の楽しみはお外でバイオリンを弾くことでしたね、わ、忘れてましたわ、オホ、オホホホ！」

笑って自分の間違いをごまかそうとするアキラ、だが…

「ボソツ、アキラさんってもしかして、更年期障害？」

雅巳の思わず吐いた呟きを聞いてしまった。
漆黒の髪の毛を逆立て雅巳に詰め寄るアキラ

「まゝさゝみゝさゝまゝ！！」

「え、あ、ちよつ、ちよつとアキラさん？ な、なんで怒ってるのでしょうか？」

「すつとぼけないで下さい！ 今わたくしの事、更年期障害呼ばわりしましたでしょうが！」

「あつ、き、聞こえてたんですか、や、やだなあ、嘘ですよ、こんな綺麗なアキラさんが更年期障害な訳無いじゃないですか」

「そうです！わたくしは更年期障害ではありません、確かにスーパーにお買い物に行った時に買う予定だった食材とか、調味料とか、忘れてしまったりしますけど、多分！いや、絶対！否！断じて！更年期障害ではありません！これは元々の特性です！そうです！これは天然なのです！天然ボケなのです！」

「て、天然ボケですか…」

「まゝさゝみゝさゝまゝ！！ 言うに事欠いてわたくしを天然ボケ扱いですか！？わたくしの事を馬鹿にしてるんですか！」

「え？、で、でも天然ボケって言ったのはアキラさんの方じゃ…」

「問答無用！まさか、雅巳様がわたくしの事をそんな目で見ていたなんて、アキラ悲しいです！何処で育て方を間違っただんでしょ…」

そう言いながらバックに手に入れまさぐるアキラ
その目は悲しみというよりは喜びに染まっていた。

「ちよつ、ちよつと待つてくださいアキラさん！誤解です！誤解ですってば！それにアキラさんに育て貰ったおぼえはありません！」
「ありませんありません」と言ってしまう程、雅巳は混乱していた。
その理由はアキラのバックにある…経験で知っているのだ、そのバックから何が出て来るのかを…

「沙蚕…オホン！誤解ですか？」

分かりにくいボケをするアキラ。そう言うボケを散々聞かされて来た雅巳は思わずツツコンでしまいそうになるが、ぐっと堪える。ここで思わずツツコンでしまったらきつとアキラはバックの中身を取り出し解放してしまうだろう、過去にあった解放の事を思い出して雅巳の背筋に悪寒が走った。

「…あの、雅巳様？」

「え、あ、そ、そうです！誤解です！」

かなりの間過去のトラウマに浸っていたのだろう…
雅巳はトラウマを心の引き出しにしまつとまっすぐアキラの紅い瞳を見つめる。

「なんで、そう思うんですか…」

アキラの紅い瞳に動揺が走る。

その瞳を真つすぐ見つめ返す雅巳

「その理由は…」

アキラが口を開く。

ゴクリ、雅巳が喉を鳴らし唾を飲み込む。

「百一文字以内、九十九文字以上、一分以内にお答え下さい、始め
！！」

「え、ええっ！ちよっ、ちよっま！…じゃなくて、マジ言ってるす
か！アキラさん！！」

確認をアキラに取る雅巳。

だが、返って来た言葉は無情にも雅巳を突き放す。

「ええ、オオマジです、そりやもう、働きバチが労働が嫌で女王バチを刺し殺すぐらいオオマジです！」

（え、え、働きバチがクーデター起こしちゃうぐらいマジなの？
つか、それって、例えとしてあっているの？）

その場で、真面目にアキラの言った言葉を考え込む雅巳。
だが、考えが纏まらない。

（働きバチは女王バチに仕える為に生まれてくるんだよね、って事は女王バチを働きバチが刺し殺すのは間違いで、あくでも、働きバチだって自由になる権利は持つていても良い訳で、ってか、個人的には働きバチを応援したいな、だって、成虫になった時から女王バチに仕えなきゃいけないって、死ぬまでずっと女王バチの世話しなきゃいけないんですよ、あつても、女王バチが居なきゃ働きバチも生まれてこないんだ、だったら、女王バチの世話しなきゃいけないよね、うーん…）

アキラワールドにはまってしまい頭を抱え込み考える雅巳
今の雅巳の頭の中では女王バチと働きバチが戦っている、一方は自由を勝ち取る為、もう一方は今までの生活を守る為に…

「あ、あの、」

「週休二日を提唱する！！」

「ひゃ！」

おそらく、女王バチと働きバチの戦いは法廷へと移動したのだろう

雅巳は働きバチを擁護する言葉を発しながらアキラワールドからの帰還を果たした。

「え、えっと、雅巳様？もう一分を超えてしまったんですけど…」
「はあああ！ちょく意味不明なんですけど！大体、自分自身の事は自分自身でやれよ！」

…果たしていなかったらしい、どうやら雅巳は未だ働きバチの為に戦っている。

「え、えっとですね、雅巳様出来ればこちらの世界に帰って来て欲しいなあ…」なんて、アキラは思うのですけど」

「ん、なに？」

あらぬ方向を向いていた雅巳が顔を振り向かせ、アキラの方を向く…だが、

「んだつてえ！！働いた事の無いシャバガキが働きバチの気持ちを分かるか、だつてえ！つか、お前らの擁護してやってんだろぅが！こつちやあよお！」

「あ、あの雅巳様？ど、どうか落ち着いて下さい？」

人格が変わる程、怒鳴る雅巳をどうにか落ち着ける為にアキラは微笑みを浮かべ、肩に手を置くが振り払われる。

「いーか、よく聞け！」

と、言い、ズビシッと指先をアキラに向ける。

どうやら、アキラは雅巳の中では働きバチらしい。

「お前らは知らないかもしれないけどなあ、家にはちょく働かない冥土が居るんだよ、ああ？あんだってえ？字が違う？違わねえよ、読んで字の如く冥土だよ。両親が家にたまにしか帰ってこないから雇ってくれたんだけど家事はしない、したとしてもよく間違えるし、だから必然的に俺が家事しねえといけねえんだよ、この間やつと、家事してくれたと思ったら緑色のカレーが出て来たんだぞ、腹が痛いつて断つて逃げ出そうとしたら、アイアンクローだぞ、食べなきゃ頭を破壊されそうだから全部食べたよ、その後、一週間寝込んだぞ、お陰で今まで頑張つて来た皆勤賞がパくだ、こんちきしょく」

長らく溜まつてきた不満だろうか？息継ぎ無しで言い終わった雅巳が肩で息をしていると、真後ろから飛ぶ鳥を落とすほどの殺気が放たれた。

「言いたい事はそれだけですか？」

凜とした声がビルの屋上に響く。殺気によってアキラワールドから意識を取り戻した雅巳は恐怖のあまりガチガチになりながらも後ろを振り向いた。

「…」

そこには、黒いワンピースを着た悪魔、いや、修羅が立っていた。

「…」

見なきゃよかった、振り向かずにその場から逃げ出せば良かった、と、雅巳は後に話している。

「…えっと、ですね、アキラさん？僕が今言ったと思われる言葉は

ですね、全部、宇宙人が僕の脳を支配して発した言葉ですのでお気になさらずに居て下さい」

「あらまあ、そうなんですか、それはわたくしとしては残念ですけど、だったら仕方ないですね」

口から出任せを吐く雅巳にやんわりと同意をするアキラ

口調とは打って変わって、その声質は物凄く寒い。

「ど、同意をして頂くのは物凄く有り難いのですが、その、右手に持った物を出来れば床に置いて頂くか、バックへGO！GO！みたいな感じにして頂くとばかぁ嬉しいなぁなんて」

恐怖に引き攣りながらも精一杯の笑顔でアキラに返事を返す雅巳。

言葉遣いに変になってしまったのはしょうがない、目の前の人物は殺気でたった今上空を飛び周っていた鷹を墮したのだから…何でこんな所に鷹が？

「あらあゝ大変大変」雅巳様が変になってしまわれたわゝほんと大変」

端正な顔に微笑みを張り付けたアキラが冷たい声で言う。

「へ？、な、何を言ってるんですか？アキラさん」

未だ己が犯してしまった失敗に気が付かない雅巳

「お顔は大変よろしいですけど、言葉遣いになっていませんよねえ、ああっ、そうでしたわ、雅巳様は一度、宇宙人が脳を支配して居たんでしたわよねえ、嫌だわぁ、天然ボケと更年期障害とサボリグセ

わゝあゝ」

濁音が本来付かない文字に濁音を付けるという無駄に高等技術を見せるアキラ

その顔は、おそらく、笑みを浮かべようとしたのだろう、頬が不気味に吊り上がっていた。

「ア、アキラさん？なんか物凄く嫌な予感が致すのは僕の気のせいですよー？」

首を傾げ、語尾長くして可愛くして見せる雅巳

「いいえ」 違いますわ雅巳様」

「あ、あははー…。デスよねー」

「はい」 それでは御覚悟を」

その後、たまたま近くを通りかかった帰宅途中のサラリーマンがこの世の物とは思えない叫び声と不気味な笑い声を聞いたとか聞かなかったとか」

関係ない物語り、二つ目

『キヤーーーーーー!!!!!!』

サラリーマンやOL達が行き交う駅の近くの横断歩道で上がるいろんな人の悲鳴。

その悲鳴を聞きながら高校の地獄のような試験を終えて帰宅途中の私は思った。

走馬灯って、ありや嘘だな、と。

キキイイイツ!!!!!!

やや明るい藍色の高校の制服を着た私の目の前に映るのは、大型のトラックがやや左へスリップしながら突っ込んでくる光景。

はつきり言って避け切れてないし、自分でも避けれない。

ドンッ!

痛い! と絶叫したくなる程にトラックの前面が当たった右肩へ痛みが走るが、肺の空気が押し出された今の私には掠れ声すら出せない。

痛みに顔をしかめた私は軽い浮遊感の後、薄汚れた空を無理矢理見せられながら頭への衝撃を感じてその景色を最後に意識を刈り取られた。

「おい！ 起きろ！！」

掛け布団ごしに感じる緩やかな揺さぶりと、甲高い女性特有の声に私は少しだけ意識を覚醒する。

「起きろ！ 起きろ！ 起きろ！」

…どうやら声の主は私を起こそうとしているらしいけど、…ごめんなさい。

一周間も試験のせいで徹夜漬けの私は目の下に濃い隈が出来る程、睡眠を欲している。だから…

「おやすにいなちゃん…」

言葉もほどほどに私は声の主に再度睡眠に入る事を宣言して掛け布団に包まった。

「…のやろお！ 起きろお！！！！！！！！」

「…」

知らんぷり知らんぷり、今の私は睡眠を貪る事に忙しいのだ。

「…そうかいそうかい、そうやってあたしを無視するのかい、だったらあたしの本領を発揮してやる！」

「…」

…なんか言ってるけど、おやすみなさい。あ、そうそう、私は非常にデリケートだから眠る邪魔したら身体のがんが、凹む、よ。

カチッ

「ふふふふふ♪ もえろっ♪ もえろおっ♪」

「……………あつう！？」

二度寝という至福がそこまで迫って来た睡眠と覚醒の狭間で、いきなり熱くなった掛け布団に私は無理矢理に覚醒の方向に引き戻された。

「やっと起きた？ 二度起きないかと心配したんだから♪」

跳び起きた私の目に映るのは手にライターを持った一人の少女と、私の上でメラメラと燃える掛け布団。

ああ、だから熱いのか…。

「……………つて、燃えてる！！！！？」

バサッ！

慌てて掛け布団の消火に移る私、必死に燃えていない掛け布団の所を被せてなんとか消火。

「ふふふふっ♪ あたしを無視するあなたがいけないんだから♪」
ベットしかない白作りの部屋の中でその光景をさも楽しそうに笑う少女に、私はムカついたのでとりあえず一発。

「つう！？ 何すんのよ！？」

「何すんのよ！？じゃあないでしょうが！ 私を焼き殺す気！？
こんがり焼き死ぬ気はさらさらないわ！！」

「違っわ！！ こんがりじゃ無くって、半生にするのよ！？」

「どうでもいいわ！ んなこと！ 半生にしろ何にしろ殺す気満々じゃない！？」

「うんっ！！！！！」

「そこでめっちゃ良い笑顔するなあ！！！！！」

言葉とともにもう一発少女の頭を殴って私はふっと思い出した。

あれれ、確か私ってトラックに撥ねられたんじゃあ…

「つつ！？ このくそがあ！！」

パシッ！

私に殴られて頭に來たのだろう少女が殴り返そうとしてくるが、私はその拳を右手で止める。

「なっ！？ あたしの拳を止めた！？」

にしても、この少女の格好は何だろう？ 赤色のセミロングの髪に黒いワンピースで頭と背中には角と翼って明らかにコスプレ、病院に來る格好ではないでしょうに。

ググッ！！

「あのさ、ちょっとお姉さんの話を聞いてもらっていいかな？」

少女の拳を受け止めた右手に力を込めて握って私はニッコリと微笑む。

対する少女は痛みに顔をしかめているが私は華麗に無視。

「ちよっ、い、痛いから離しなさい、馬鹿あ……」

「年上にその言葉遣いはけしからんよコスプレ少女ちゃん？」

「だ、誰が年下でコスプレ少女よっ！」

うーん、私としては嫌だけどこれもコスプレ少女が社会に出る時の為…、しょうがないから右手の力を上げますかな」

いや、本当に少女をいたぶるのは嫌なのよ。 ふふふっ」

「…がつ、ああああ！ わ、わかった、わかったから綺麗でビューティフルでプリティなお姉さんっ！ 話を聞かせて下さいい！！」

うんうん」 わかってくれて嬉しいわお姉さんは。

ということで拘束していた右手を離し質問をする私、コスプレ少女はこちらに恨みがましい視線を送ってくるがまたまた私は無視する。

「確か私ってさ、トラックに撥ねられたような気がするんだけど、何で私はこんな所にいるのか知ってる？ コスプレ少女ちゃん」

「ん？ ああ、それはあんたは死んだからよ」

「…は、い？ い、いい加減な事を言ったら流石にお姉さんでもキレちゃうわよ？」

いい加減な言葉に額に青筋を立てながら問い返す私。その顔を見て、コスプレ少女は恐怖に顔を染める。

多分、今の私は般若のような顔をしているんだろうな。

「…ちよつと、あんた本当に覚えてないの！？ 死んだのよあんたは！ 死・ん・だ・の・！！」

拳を振り上げる私に必死に、私は死んだ、と言い聞かせてくるコスプレ少女。

…嘘をつけ、現に私はここで生きているじゃないか。

「あゝ、もうっ！ あんたトラックに撥ねられたって覚えてるんでしょ！？」

「…うん」

「そう！ そのトラックに撥ねられたあんたは死んだのよ！」

「そんな筈ないじゃない、私はこの通りぴんぴんと、…？」

生きてるし、と言いかけて目をやった手を見つめて固まる私。

「…ナ・ニ・コ・レ・？」

手をコスプレ少女に向け、若干ロボットみたいな声にながらも私はなんとか声を搾り出す。

その手はさき程あった人間の私の手では無く、まるで猫の手がそのまま巨大化した手があった。

「お、あんたも悪魔化が始まったらしいわね」

「あ、…悪魔化？」

枕元にあった鏡に写った自分の姿。

そこには目を真ん丸にした私が自慢の黒髪のロングヘヤーから猫の耳を生やしている姿が…。

「な、な、な…！？」

「…そうよ、悪魔化つてのはね、あたし達が住む魔界に落とされて来た人間達になる病気みたいなもので、あたし達悪魔になっちゃう病気。つっても中身は人間だから完璧に悪魔になる訳じゃないから外見は悪魔、中身は人間、…でも中途半端に人間の心が残ってるからあんまり悪魔として使えないのよねえ。」

驚きの余り、鏡の前で口をパクパクさせている私を見つめて小馬鹿にした顔でコスプレ少女はそう説明してくる。

「……………」

「………はあ」

口のパクパクを止めて固まる私。鏡に写ったのが私だとは本当に信じられない。

そんな私を前に溜息を吐いたコスプレ少女はどこから取り出した携帯らしき物を弄りはじめた。

「…本当めんどくさいわね人間って、姿が変わっただけですぐに精神をやられるんだから…。…百年振りに魔界に人が落ちてきたから少しは期待してたんだけど…所詮は人間…か」

そう言いながら手元の作業が終わったらしいコスプレ少女は携帯らしき物を、パタンツと勢いよく閉じる。

「…お呼びですか？」

それを合図のように女性が突然現れた。

こちらは少女とは違い、普通と言っても差し支えない赤いスーツ姿だが、ただ顔には白いマスクを付けている。

「ん、やけに早いわね？」

「当たり前でございます。わたくしはあなた様の従順な下僕ですから」

コスプレ少女の疑問に女性は微笑みながら答えた。

と、言ってもマスクを付けているので、声が微笑んでいるように聞こえただけだが。

「…ふん？ …まあ、いいわ。あそこで固まってる女を廃人所にでも送って…」

顔をマスク女性に向けながら、背後の人間を適当に手で指してマスク女性に命令するコスプレ少女。

「…本当によろしいのですか？ ルクシア様？ 久々に人間が魔界にやって来た、とあんなに楽しみにしておられていたのでは？」

「何を言っているのあなた？ 私は壊れた人間には興味はないのよ。それくらい私の下僕なら察しなさい」

「…ですが、ルクシア様。あの人間が私には壊れているとは思えないのですか？」

何を言っているの？、と口に出して人間の少女に振り向いたルクシ

アは驚いた。

さっきまで固まっていた少女が鏡に向かって微笑んでいるのだ。

「…最高だわ」

人間に生まれて十六年、まさか猫になれるなんて思いもしなかった。いや、実際はコスプレ少女が言ってたように私は死んだのだろうけど。

「むふ、むふふふ」

鏡に写る私の姿についていつい笑い声が漏れてしまう。

私の自慢の黒長髪の頭からは猫の特徴的な三角耳、手は猫の肉球付きの手、お尻からは猫の尻尾。

その全ては私の好きな猫の毛色、黒。

最高だ。文句なし！ と叫びたくなる自分を抑えて充分に自分の姿を堪能した鏡から目を離して、何でか分からないけど固まっているコスプレ少女に私は目を移した。

「あ、あんた…。何で正気を…？」

「何？ コスプレ少女ちゃん。てか、横にいる人誰？」

…私が目を離していた時に何があったの？

「私の名前はクローツ、ここにいらっしゃるルクシア様の忠実な下僕でございます。」

固まって口をパクパクするコスプレ少女を手で示して礼儀正しく私に自己紹介してくれるマスクを付けた女性、クローツさん。
なるほ、コスプレ少女はルクシアって名前なのか。

「ま、まあ良いわ。あんたが正気を保っていたとしてもどうでもいい事だし…。それよりも！あんた名前ぐらいいい加減教えなさい！」

高飛車に言ってくるコスプレ少女もとい、ルクシアちゃん。
ちよっとイラッとしたので私は猫の爪をシャキン。

「な、何よ？あんたは名前を聞いただけで怒るの？」

「そうじゃないのよ、ルクシアちゃん♪私は言ったよねえ？」

じりじりと近づく私にルクシアちゃんは座っている椅子から立ち上がって壁際まで後ずさる。

顔は恐怖に染まっていて、ドSの私は満足♪ 満足♪

「年上には敬語を使いなさい、って」

「い、言っていないわよ、そんな事！だいたい、あんたより私の方が二千年以上年上よ！？だから、あんたが私に敬語を使うべきなの！」

「…へえ、そうなんだ。…じゃ、ルクシアちゃんが年上なのを私は却下。だから、私に敬語を使いなさい」

「無茶苦茶言ってんじゃねえ！初めてだわ、んな事言われたの！」

「っつか、さつきから爪で私をつつくな！」

むう、悪魔が長寿命なのは、何となく分かる気がするけど…。

なーんか、軽く嫉妬するわ。

だって、私より二千年以上も年上なのにみずみずしいお肌だし、シワなんて見つからないから。

…羨ましい。

「…まあ、お二人とも。戯れはそれほどにしてお茶にしませんか？
元人間さんにもいろいろとお話がございますし」

嫉妬心燃える私の目を見て、怯えまくっているルクシアちゃん。

とりあえず、非常にみずみずしいお肌が気に食わないので爪で傷を付けてやろうとしていた私にクローツさんが声をかけてくる。

（チツ、命拾いしたわね）

と、表情に出して残念そうに私は爪をしまう。

それと同時にルクシアちゃんはダッシュで私のそばを離れて行く。

どうやら、ルクシアちゃんに私の言いたい事は伝わったらしく、いつの間にか用意されていたティーテーブルに座っていたクローツさんの膝に「た、助かったわ。クローツ」という言葉と共にへたりこんだ。

…覚えてらっしゃい、ルクシアちゃん。

「…それで、元人間さん。ルクシア様が聞きましたようにあなたの名前は何なんですか？」

ルクシアちゃんに遅れる事、数十秒。

ティーテーブルに着席してお茶を飲んでいた私にクローツさんが問い掛けてきた。

てか、クローツさん、無茶苦茶テーブルが洋風なのにお茶の中身が緑茶って。…まあ、美味しいから良いですけどね。

「えっと、私の名前は、……………あ、あれ？」

（…な、何でか分からないけど、自分の名前が出てこない。由香？…違うな。沙織？）

必死に自分の名前を思い出そうとする私。
けれども、いくら思い出そうとしても名前は出てこない。

「ふーん、あんた記憶喪失なんだ」

頭を抱えている私に小馬鹿にしたようにルクシアちゃんが言うてる。

…ごめん、一発殴らせて。

「そのようですね、ルクシア様。原因は何かわかりませんが、名前がないのは不便ですね」…うーん、たしかにクローツさんの言う通り名前がないのは不便だ。

「…それじゃあ、私の事は…「暴力女」って呼んで下さい」

仮称を告げようとした私の言葉に割って入ってきやがったルクシアちゃんの声。

ポコ！

してやったり、と言わんばかりに笑みを浮かべるルクシアちゃんに私は正義のネコパンチ。

「ぶほお！？」

見た目とは裏腹にめっちゃめっちゃ威力のある私のネコパンチを喰らってルクシアちゃんは椅子から転げ落ちた。

「えっと…、元人間さん？」

立ち上がってきて私に仕返しの拳を振るうルクシアちゃん。

私はカウンターのネコパンチをして、再び床にルクシアちゃんが沈むのを見届けてからクローツさんに向き直る。

「はい？」

「なんかいろいろとルクシア様の下僕として言いたい事があるのですけど…。まあ、この際私は何も見ていなかった事にします。…それで、元人間さん。あなたの事をなんて呼べばよろしいのですか？」

「ふがー！」と、雄叫びをあげながら両手を振り回して私に接近しようとしているルクシアちゃんの顔に左手を当てて阻害しながらクローツさんの質問に私は答える。

「えっと、仮称、ということなんですけど、私の事はカナタって呼んで下さい」

「分かりました、カナタさん。魔界へようこそ。なにかと人間界と比べて不自由な所もあるでしょうが、困った事があつたら何なりと言つて下さい。私は出来る限り努力致しますので」

クローツさんの優しい言葉に私、カナタは笑顔で答える。

…まあ、魔界と聞いて不安もあるけれども、なんとかかなりそうだと私は思う。

とりあえず、今は、

「クローツさん、このルクシアちゃんをどうにか出来ませんか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4087f/>

文化祭、二日前の夜

2010年10月22日13時42分発行